

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析 — 文末省略部分の理解過程 —

内藤晶子

Ellipsis analysis on Japanese spoken language based on Relevance theory: reconstruction on the ellipsis on the end of sentences

Akiko Naito

This paper elucidates a deductive process of Relevance theory through the analysis of the ellipsis on the end of sentences in natural Japanese spoken language. On Relevance theory, humans try to obtain a great contextual effect from new information at smallest processing effort. This paper elaborates how listener reconstructs the ellipsis of the sentences and decodes the speaker's message; it can be carried out the conversational situation, context, and participants' presuppositions, background, knowledge, experiences and assumptions. The findings of this paper is that there is a difference in interpretation of the ellipsis between the listener who shares the information with the speaker and the listener who doesn't. The listener who shares the background information with the speaker is able to understand the speaker's intention correctly. On the other hand, the listener who doesn't shares the background information with the speaker has to infer the speaker's implications in context and tends to make various interpretations of the ellipsis part. Thus, he/she may misunderstand the speaker's intention.

【キーワード】 前提、想定、演繹過程、文脈含意、会話における情報量の差

0. はじめに

本稿は Sperber & Wilsonの「関連性理論 (Relevance theory)」に基づき、自然で日常的な話し言葉における「文末部分の省略現象」に注目し、文末部分に何がどのように省略されているのか、なぜ文末の省略が行われても聞き手は省略文を理解で

言語科学研究第4号(1998年)

きるのかについて、「文末の省略部分」を復元しながら、語用論的に考察し、分析を行うものである。本稿で分析対象とする「文末部分が省略された文」とは次の(1)の発話文のことである。本稿では、文末部分に省略されていると考えられる語句を()の中に復元する。

(1) お抹茶ですから(どうぞ、召し上がってください)。

(1)の()の中に復元してある、文末部分に省略されていると考えられる語句は、妥当な語句とは考えられるが、本当に正しく発話者の意図を理解し、復元しているだろうか。そして文末部分に省略されている語句は1通りだけだろうか。筆者は、何通りもの語句が文末の省略部分に復元されるのではないかと考える。

また、発話文だけで、省略されている語句を復元できるのだろうか。次の、益岡・田窪(1992)の発話例(2)は、いわゆる文末詞が(1)と同じ「から」であるが、発話文だけで文末の省略部分を復元しているものである。

(2) 私はここにいますから(用があったら呼んでください)。

(益岡・田窪 1992: 172)

(2)の()の中に復元してある、文末部分に省略されていると考えられる語句は、妥当な語句とは考えられるが、(2)の発話文には、この文が発話された文脈、状況の説明がない。例えば相手が一人きりになることを不安がっている状況では「私はここにいますから(大丈夫です/安心してください)。 」などと復元できよう。また例えば図書館などで、相手が私物を置いて本を探しに行くような状況では「私はここにいますから(ご自由に本を探しにいらっしやい)。 」などと復元できよう。このように文末部分に省略されている語句の復元には、発話文1文だけでは、あらゆる可能性が考えられる。本稿では「文末部分の省略現象」の理解過程には、発話された場面、状況、話の流れや文脈、また発話者の背景、心理、知識、経験、想定などの要素がかかわってくると考える。つまり本稿では、談話単位の文脈の中で、文末部分に省略されている語句を細かく分析していく必要があると考え、本稿では(1)の発話文を(3)のような文脈の中で分析していく。

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

(3) Aが客の義姉Bを接待するためにお茶菓子を運んできたときの会話

A (女性、40代)、B (女性50代、Aの義姉)

A01: はい、どうぞー。

B01: はい、どうもー、ありがとうございます、ああ。

A02: お抹茶ですから()。

B02: おいしい、おいしそう、私、好き。

(3) A02の発話を本稿では、「文末が省略された文」とし、分析対象とする。

本稿では以下のことを述べる。「文末が省略された文」を理解するためには、会話や発話者についての情報、知識を聞き手がほぼ熟知している場合は、ほぼ発話者の意図通りに理解できる可能性が高い。しかし会話や発話者についての情報、知識を聞き手が知らなければ知らないほど、発話者の意図通りに理解できない。会話や発話者についての情報、知識を聞き手がどのくらいもっているかによって発話者の伝達意図の理解に「差」が出てくる。

本稿では、「省略の根本原則」を久野(1978)に従う。

(4) 省略の根本原則

省略されるべき要素は言語的、或いは非言語的要素から、復元可能(recoverable)でなければならない。(久野 1978:8)

本稿では、ある発話がなされた場面、状況、話の流れや文脈、また発話者の背景、心理、知識、経験、考え方などの要素を考慮すれば、ほとんどの「文末が省略された文」の省略部分には、何かしらの語句が復元できるという立場をとる。そして聞き手がなぜ省略部分を復元し、理解できるのかについて、Sperber & Wilsonが提唱している「関連性理論」に基づき説明を試みる。次に「関連性理論」について概観する。

1. 関連性理論

Sperber & Wilsonが提唱している「関連性理論」とは、会話における「発話理解」について説明した理論である。会話において話し手は、聞き手が発話を話し手

言語科学研究第4号(1998年)

の意図通り正しく解釈するように努めている。しかしほとんどの発話は、曖昧な語句、不完全あるいは省略された表現を含んでいる。このような表現は場面が変われば意味しているものが異なり、補うべきものも異なる。ある発話を解釈する際、聞き手はその発話の曖昧な表現が意図する意味は何かを決定しなければならない。

「関連性理論」では、人間はある時点で最も関連性のある「想定(assumption)」を処理する関連性志向であるとする。そして聞き手の想定形成や理解にかかわる推論過程は「演繹過程(deductive process)」のみによるとする。

「関連性理論」によると演繹装置の記憶の中の「アドレス(address)」には様々なタイプの情報が貯蓄されているが、その1つに「百科事典的記載事項(encyclopaedic entry)」があるとし、これは人、時、文脈によって変化し、選択されるとしている。

「関連性理論」とは、発話文が「最小の処理労力で最大の文脈効果をもつ」ための理論である。本稿では「省略」という形態による「最小の処理労力」で、話し手の背景、状況、経験、考え方つまり「文脈」の情報を含む「最大の文脈効果をもつ」ものが「省略文」であると考え。 「関連性理論」の「意図明示推論的伝達」を本稿での「文末部分の省略現象」が表れている会話とする。そして「関連性理論」の「文脈含意(contextual implication)」の概念が、「文末の省略部分」にあてはまると本稿では考える。次に「関連性理論」における「意図明示推論的伝達」の説明をみていく。

1.1. 「関連性理論」における「意図明示推論的伝達」の説明

「関連性理論」は「意図明示推論的伝達(ostensive-inferential communication)」を分析対象としている。次に「意図明示推論的伝達」の会話例をみる。

(5) A：コーヒーを飲みますか。

B：コーヒーを飲むと目がさえるんです。(Sperber & Wilson 1995: 34)

(5) Bは、コーヒーが飲みたいのか飲みたくないのか、Bの意図はわからない。しかし例えば(5) Aが、下に述べるBの状況(6)に気づいているとすると(7)の想定が成り立つ。その場合(5)でのBの発話によって明示的に表現された「前提

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

(presupposition)」と、Bの伝達意図の証拠になる状況(6)と想定(7)とを合わせると「演繹過程」により、Aは「文脈含意」として結論(8)を導く。

- (6) Bの状況 → 今日は仕事がない。
- (7) Aの想定 → Bは起きていたくない。
- (8) Aの結論 → Bはコーヒーを飲みたくない。

まったく同様に、もし(5)Aが、下に述べるBの状況(9)に気づいているとすると(10)の想定が成り立つ。その場合(5)でのBの発話によって明示的に表現された「前提」と、Bの伝達意図の証拠になる状況(9)と想定(10)とを合わせると「演繹過程」により、Aは「文脈含意」として結論(11)を導く。

- (9) Bの状況 → 今日は仕事がたくさんある。
- (10) Aの想定 → Bは、今は眠いが、起きていたい。
- (11) Aの結論 → Bはコーヒーを飲みたい。

Sperber & Wilsonによると(5)の「意図明示推論的伝達」で、話し手は発話により「意図明示」を行う。聞き手は話し手の今現在の状況に関連した伝達意図として、「前提」などの情報に基づいて「想定」し、ある結論を「演繹過程」により導き出す。つまり「演繹過程」を経た結果、「意図明示推論的伝達」の文脈の中で、「前提」と「想定」の結合により「文脈含意」が結論として導き出される。

「関連性理論」の「意図明示推論的伝達」を本稿の「文末部分の省略現象」が表れている会話とする。そして「関連性理論」の「文脈含意」の概念が、「文末の省略部分」にあてはまると本稿では考える。

次に本稿で分析対象とする、文末の省略現象が表れる会話の採集法、文末の省略部分の分析方法について述べる。

2. 文末の省略部分の分析方法

本稿では筆者が実際に採集した、自然で無意識に話している日常会話のみを分析対象とする。会話は、話者の目の前にカセットデッキを置き、カセットテープに録

言語科学研究第4号(1998年)

音して採集した。本稿で分析対象とする会話は、親子、兄弟、親戚同士の会話である。その理由としては、親しい者同士ならば、共有する知識や想定が多いので、省略文が頻繁に現れると考えられるからである。会話の録音は1996年1月に行った。

分析にあたり、文末の省略部分には何通りもの語句が復元できる可能性があると考えられるが、発話者が意図していた語句は1通りかもしれない。省略部分の正しい復元語句は発話者本人のみが知っているものと考えられる。しかし発話者本人に、実際にどのような意図で発話を行ったのかたずねてみたが、発話者本人には答えられなかった。そこで筆者は、発話された場面、状況、また発話者の背景、心理、知識、経験、想定、文末部分が省略されている文の前後の文脈などを考慮して分析し、筆者の判断で発話者が実際に経たであろう「演繹過程」を導かなければならない。しかし筆者が1人で発話者の「文脈含意」を導き出す場合、筆者の主観が含まれることが憂慮される。そのために本稿では、文末の省略部分に復元する語句の客観性、信頼性、妥当性、多くの可能性を得るためにアンケートを実施した。つまり本稿では、発話された場面、状況、文脈、前提、また発話者の背景、心理、知識、経験、想定などの情報をほぼ熟知していると考えられる筆者が文末の省略部分に復元する語句と、このような情報をもっていないアンケート対象者つまり第三者が文末の省略部分に復元する語句との相違を確かめるためにアンケートを実施した。

アンケートの内容としては、筆者がテープに採集した会話の中から、文末部分が省略されていると筆者が考える発話文を含む会話を文字化し、談話単位であげた。そしてある会話が行われているときの情報として、会話の話題と、話し手の性別、年齢と、話し手同士の親疎の関係についての情報を以下本稿の(12)(13)の形態のように与えた。アンケート対象者には、これらの情報のみに基づいて、筆者が考える文末の省略部分に何が省略されているのかを考えてもらった。

アンケート対象者は全員で22人であり、第1に日本語を母語とする人、第2に本稿で分析対象とする会話参加者以外の人、第3に言語学や日本語学を専門にしていない人という3つの条件を満たす人である。

筆者とアンケート対象者は、ある会話に対する情報量に「差」がある。筆者は、発話された場面、状況、また発話者の背景、心理、知識、経験、想定などの情報をほぼ熟知していると考えられる。しかし本稿で分析対象とする会話を第三者として

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

外からみることになるアンケート対象者は、これらの情報を知らないと考えられる。会話についての情報をほぼ熟知していると考えられる筆者と、ほとんど知らないと考えられるアンケート対象者が導き出す文末の省略部分に復元する語句、つまり発話者の「文脈含意」は異なってくるものと思われる。発話された場面、状況、また発話者の背景、心理、知識、経験、想定などの情報をほぼ熟知していると考えられる筆者が導いた演繹過程を、「実際に行われたと考えられる文末の省略部分の理解過程」として扱う。

「関連性理論」では、語句や文の意味表示と、実際に言語コード化される思考との間にはかなりの「差」があるとし、この差は推論によって埋められるとする。発話の時や場所、話し手の意図などの非言語的な情報がない文や語句だけでは伝達を解釈できないとし、解釈してもたいていは異なる解釈なるとしている。本稿で分析対象とする会話についての情報をほぼ熟知していると考えられる筆者と、ほとんど知らないと考えられる第三者であるアンケート対象者では、文末の省略部分に復元する語句が異なると思われる。アンケート対象者は自らの推論によって文末の省略部分を復元している。アンケート対象者が導き出した「結論」である発話者の「文脈含意」に基づいて筆者が導いた演繹過程を、「アンケートにみられるそのほかの考えられる文末の省略部分の理解過程」として扱う。

本稿では、ある物事についての価値観があらわれている姉妹の会話と、ある物事の処理方法について話している親子の会話についてみていく。

3. 会話の分析

まず3.1.でお抹茶について肯定的な価値観をもっている発話者の会話をみる。次に3.2.では現在飼っている犬の引っ越し後の扱いについて、引っ越し後は母親に飼ってもらいたい息子の発話と、犬をひきとろうとしている母親の発話をみる。発話者がどのような価値観や考え方をもっているかを知らないアンケート対象者は、発話者の伝達意図を異なった角度から推論している。

3.1. ある物事についての価値観があらわれている会話

Aが客の義姉Bを接待するためにお茶菓子を運んできたときの会話をみる。

言語科学研究第4号(1998年)

(12) = (3) Aが客の義姉Bを接待するためにお茶菓子を運んできたときの会話

A (女性40代)、B (女性50代、Aの義姉)

A01：はい、どうぞー。

B01：はい、どうもー、ありがとうございます、ああ。

A02：お抹茶ですから()。

B02：おいしい、おいしそう、私、好き。

(12)の会話ではA02の文末部分が省略されていると考えられる。(12)A02の発話について「関連性理論」の演繹過程に基づき分析し、文末の省略部分を復元していく。

3.1.1. 実際に行われたと考えられる文末の省略部分の理解過程 (演繹過程)

- A02の発話の文末省略部分

Aの前提 1： Aはお抹茶が好きであり、お抹茶はふつうのお茶よりもおいしい、と思っている。

Aの前提 2： 義姉Bが、ふつうのお茶よりもお抹茶が好きなことを、Aは知っている。

Aの前提 3： Aは義姉Bが来るので、わざわざお抹茶を用意した。

Aの想定 → お抹茶が好きな義姉Bの為に、私はわざわざお抹茶を用意しました。

Aの結論 : A02「お抹茶ですから (おいしいですよ)。」

A01「はい、どうぞー」と元気よくお抹茶をもってくるAの態度、そのお抹茶に対するBの発話、義姉B02「おいしい、おいしそう、私、好き」から、Aも義姉Bもお抹茶に対して、肯定的な価値観を持っていると考えられ、Aも義姉Bもお抹茶が好きであると考えられる。このAのもっている「前提」により、Aは義姉Bがお抹茶が好きであることを以前の接待のときに確信していると考えられる。だから今回も義姉Bにお抹茶を楽しんでもらおうと思い、お抹茶をもってきたと考えられる。

アンケート対象者が文末の省略部分に復元した語句を参考に、そのほかの考えら

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

れる文末の省略部分の理解過程についてみていく。

3.1.2. アンケートにみられるそのほかの文末の省略部分の理解過程 (演繹過程)

- A02の発話の文末省略部分

Aの前提 1: Aはお抹茶が好きであり、お抹茶はふつうのお茶よりもおいしい、と思っている。

Aの前提 2: Aは前提1をもっているが、義姉BもAと同じように、お抹茶はふつうのお茶よりもおいしいと思っているかどうかわからない。

Aの前提 3: お抹茶は人によって好き嫌いがあるお茶である。

Aの前提 4: Aは、義姉Bがお抹茶が好きかどうか、わからない。

Aの想定 → 接待するA自身はお抹茶は好きでおいしいと思っているが、お抹茶は味が独特なので、義姉Bはお抹茶が嫌いかもしれない。

Aの結論 : A02「お抹茶ですから（お口にあうかしら／好き嫌いがあるからどうかしら／おいしくないでしょ）。」

このように省略部分を復元したアンケート対象者は、お抹茶は味が独特で、人によって好き嫌いがあるので、だれもお抹茶を好むとは限らないと思っていると考えられる。接待するAは義姉Bの好みが変わらず、つまり義姉Bがお抹茶が好きかどうかかわらず、不安な気持ちでお抹茶をもってくるだろう。その場合は、A02の文末の省略部分にはこのような復元語句が適切と考えられる。

3.1.3. アンケートにみられるそのほかの文末の省略部分の理解過程 (百科事典的記載事項)

- A02の発話の文末省略部分

百科事典的記載事項 1: 客を接待するときは、ふつうお茶菓子を用意するものである。

言語科学研究第4号(1998年)

百科事典的記載事項 2： 接待にお抹茶を出すときは、ふつうお抹茶だけでなく、なにかお菓子を用意するものである。

Aの結論： A02「お抹茶ですから（鹿子餅用意したの／お先にどうぞ／召し上がってください／あとお茶菓子もどうぞ）。」

このように省略部分を復元したアンケート対象者は、お抹茶を人によって好き嫌いがあるお茶とはとらえていない。「接待」という「アドレス」から取り出した「百科事典的記載事項」により、文末の省略部分を復元している。

3.1.4. 分析と考察

(12)の会話のA02の文末の省略部分の「文脈含意」に関する、発話者Aの伝達意図、聞き手Bの理解過程について考察する。

3.1.1.の演繹過程では、A自身がお抹茶が好きであること、義姉Bがお抹茶が好きであること、義姉Bがお抹茶が好きであることをAが知っていることが「前提」として知っていなければ、この「文脈含意」を導き出すことはできないと考えられる。

しかしアンケート対象者はAのもつ「前提」を知らない。だからAが初めて義姉Bを接待すると考えたのかもしれない。その場合は、3.1.2.の演繹過程が導き出される。この場合の「前提」とは、お抹茶は人により好き嫌いがあるものであること、Aは義姉Bがお抹茶が好きかどうか分からないこと、である。

筆者が導いた3.1.1.の「文脈含意」とアンケート対象者が導いた3.1.2.の「文脈含意」とでは演繹過程で使用されている「前提」が異なっている。3.1.1.では義姉Bがお抹茶が好きであることをAが知っていることを「前提」としてもっている。反対に、3.1.2.は義姉Bがお抹茶が好きであるかどうか分からないということを「前提」としてもっている。お抹茶に対するAと義姉Bの考え方や「前提」をどう推論するかにより、Aの「文脈含意」が異なってくる。Aに近い筆者と、そうでないアンケート対象者とでは、Aの伝達意図が異なって理解されている。

次に、ある物事の処理方法について話している親子の会話についてみていく。

3.2. ある物事の処理方法について話している会話

Aは今年(1996年)引っ越しをする。現在ハムスター（ねずみ）と犬を飼っている

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

る。息子Aと母親Bは現在も、引っ越した後も同居しない。引っ越し後もハムスターは大事に飼うが、犬についてはどうするかについて話している、親子の会話をみる。

(13) Aは今年引っ越しをする。現在ハムスターと犬を飼っている。

A (男性40代)、B (女性60代、Aの母親)

A01：今年、ねずみ年だから、大事にするの、大事にするの。

B01：そうだね。

A02：でも、引っ越したら、お母さん、犬()！

B02：犬？ そりゃ、もう、飼えなかったらね()。

A03：捨てるのが一番簡単なんだけどね、犬、もう、いらぬ。飽きた。

(13)の会話ではA02、B02の文末部分が省略されていると考えられる。(13)のA02、B02の発話について「関連性理論」の演繹過程に基づき分析し、文末の省略部分を復元していく。

3.2.1. 実際に行われた文末の省略部分の理解過程（演繹過程）

- A02の発話の文末省略部分

Aの前提 1： 引っ越す家で、犬は飼えるが、A自身は犬に飽きている。

Aの前提 2： 母親Bは遊びに来たときに、いつも犬をかわいがっている。

Aの前提 3： 母親Bは犬が好きである。

Aの前提 4： 母親Bの家では、犬を飼うことができる。

Aの想定 → 母親Bなら、遊びに来たとき、犬をかわいがっているので、引っ越し後、犬を飼ってくれるだろう。

Aの結論 : A02「お母さん、犬（飼ってくれ／ひきとってよ／いらぬ、あげる／もらって／預かってちょうだい）。」

- B02の発話の文末省略部分

Bの前提 1： 息子Aの要求には最大限答えたい。

Bの前提 2： Bの家では犬が飼える。

言語科学研究第4号(1998年)

Bの前提 3： Bは犬が好きである。

Bの前提 4： 息子Aが今飼っている犬をかわいいと思っている。

証拠 → この発話の後でBは犬について、B「A以外は大事にしてるんでしょ。そうなのよお。あたしだって大事だよ。かわいいものねえ」と発話し、その犬のかわいい行動について話していることより導く。

Bの想定 → 引っ越して、Aがもう犬が飼えなくなったら、自分が代わりに飼おう。

証拠 → この発話の後、B「じゃ、私が預かるわ、ワンちゃんは」と発話していることより導く。

Bの結論 : B02「そりゃ、もう、飼えなかったらね（私が代わりに飼うわ／私が飼うしかないけど／引き取るよりしょうがないね／もらうわ）。」

息子Aはもう犬に飽きており、母親Bに代わりに犬を飼ってもらおうと、母親Bに犬を押し付けている。息子Aの要求には最大限答えたいと思っている母親Bは、しかたがないけれども、息子Aの代わりに犬を飼おうと思っている。

アンケート対象者が文末の省略部分に復元した語句を参考に、そのほかの考えられる文末の省略部分の理解過程についてみていく。

3.2.2. アンケートにみられるそのほかの文末の省略部分の理解過程 (演繹過程)

- A02の発話の文末省略部分

Aの前提 1： A自身は犬に飽きている。

Aの前提 2： 引っ越した家は一戸建だが、新しい家で犬が飼える状況になるかどうかはわからない。

Aの前提 3： 引っ越した後、犬をどうしようか困っている。

Aの結論 : A02「でも、引っ越したら、お母さん、犬（どうしよう／どうするの／どうなるの／飼えるかね）。」

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

● B02の発話の文末省略部分

Bの前提： 息子Aが、引っ越した新しい家で犬が飼える状況になるかどうかかわからず、犬について迷っていることを母親Bは知っている。

Bの想定 → 息子Aが引っ越したら、犬をどうしようか困っている。

Bの結論： B02「そりゃ、もう、飼えなかったらね（どうしようか／困るね）。」

息子Aも母親Bも引っ越した後、犬が飼える状況になるかどうかわからない。息子Aも母親Bも犬をどうするか困っている会話と考えられる。

3.2.3. アンケートにみられるそのほかの文末の省略部分の理解過程
(演繹過程)

● A02の発話の文末省略部分

Aの前提 1： 引っ越す新しい家では、犬を飼える状況にはない。

Aの前提 2： 現在犬を飼っているが、もう犬には飽きていて、邪魔である。

Aの前提 3： 犬が邪魔になったら、捨てる。

Aの想定 → 犬には飽きた。邪魔なので捨てよう。

Aの結論： A02「でも、引っ越したら、お母さん、犬（飼えないよ／邪魔だね／捨てよう／おいてこうか）。」

● B02の発話の文末省略部分

Bの前提： 息子Aが引っ越す新しい家では、犬を飼える状況にはなく、犬が邪魔になることを知っている。

Bの想定 → 犬が飼えなくなったら、捨てる。

Bの結論： 「そりゃ、もう、飼えなかったらね（保健所へ／捨てましょう／捨てるしかないわ／しょうがないよ／かわいそうだけれど／無理ね）。」

このように文末の省略部分を復元したアンケート対象者は、犬に対してかなりわりきった思いをもっていると考えられる。アンケート対象者はA03「捨てるのが一番簡単なんだけどね」の発話から、Aの意図を想像して復元したとも考えられる。

言語科学研究第4号(1998年)

3. 2. 4. 分析と考察

(13)の会話のA02、B02の文末の省略部分の「文脈含意」に関する、発話者A、Bの伝達意図、聞き手A、Bの理解過程について考察する。

(13)A02の発話をAは「お母さん、犬！」と母親Bのほうを指さして発話している。A02の発話とAの指さしから、母親Bはハムスターのことから犬のことに話題がうつったことを知る。そして息子Aの家で、母親Bはいつも犬をかわいがっているという状況、息子Aはこの状況を知っているという背景、母親Bは以前犬を飼ったことがあるという会話参加者の過去の経験などから、母親Bは犬に好意をもっていると考えられる。これらが「前提」となり、母親Bは息子Aが犬に困っているのなら代わりに犬を飼おうという「想定」をもったと考えられる。筆者は(13)の会話においてこれらの知識をもっている。しかしアンケート対象者はこれらの知識をもっていない。会話参加者A、Bの背景、経験、状況などの情報を知っている筆者と、これらの情報を知らないアンケート対象者では、復元する語句が異なってくると考えられる。

アンケート対象者が導いた3.2.2.の理解過程では、引っ越し後は犬をどうするか、息子A、母親Bともにわからない場合、犬の今後の扱い方について考え迷っている会話になっていると考えられる。

アンケート対象者が導いた3.2.3.の理解過程では、息子Aの新居では犬が飼える状態ではないという「状況」を設定している。この場合のAとBは、引っ越したら犬は邪魔になるという「前提」から、犬を捨てよう、という結論が演繹過程から導き出されている。この「文脈含意」を導いたアンケート対象者は、AとBが犬に対してかなりわりきった考え方をもっていると推論している。そしてこのような「文脈含意」を導いたアンケート対象者自身も、犬に対してかなりわりきった考え方をもっていると考えられよう。犬などのペットに対して日頃どのように考えているのかによって、文末の省略部分をどのように復元するのかについて、幅がみられると考えられる。

「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析

4. おわりに

本稿では「関連性理論」の「演繹過程」に基づき、「文末の省略部分」を復元し、分析、考察を行った。「文末が省略された文」を発話した発話者の意図は省略により明確ではない。「文末が省略された文」を理解するためには、発話された場面、状況、また発話者の背景、心理、知識、経験、想定や前提などに基づく「演繹過程」を経て、その「文脈含意」を導き出していく。会話についてのこれらの情報をほぼ熟知していると考えられる筆者と、ほとんど知らないと考えられるアンケート対象者が、文末の省略部分に復元する語句は異なってくる。会話についてのこれらの情報を知らなければ知らないほど、推論がなされ、誤解が生じる可能性が高くなる。会話についてのこれらの情報をどの程度知っているかにより、発話者の「文脈含意」の理解度に「差」が出てくるのが本稿で導かれた。

〈付記〉 本稿は1997年6月に神田外語大学大学院に提出した修士論文の一部に加筆、修正したものである。本稿をまとめるにあたり御指導いただいた徳永美暁先生をはじめとする諸先生方、御助言くださった三角友子さん、鴻野豊子さんをはじめとする大学院生の方々、日本語教育学会平成9年度日本語教育実習コースの方々、深く感謝の意を表す。また本稿で分析対象とする会話のインフォーマントになってくださった方々、アンケートにご協力くださった方々に御礼申し上げる。

参考文献

- 久野 昌 (1978) 「第一章 省略」『談話の文法』 大修館書店
- 内藤 晶子 (1997) 「「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析：試論一文末の省略部分を中心に一」『文教大学国文』 第26号
「関連性理論」における話し言葉に現れる省略文の分析一文末の省略部分を中心に一」神田外語大学院修士論文
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 「第11章1節 省略」『基礎日本語文法一改訂版一』くろしお出版
- Dan Sperber&Deirdre Wilson (1995) *Relevance : communication and cognition* Second Edition Blackwell
- (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳 (1993) 『関連性理論一伝達と認知一』研究社出版) Diane Blakemore (1992) *Understanding Utterance:an introduction to pragmatics* Blackwell
- (武内道子・山崎英一訳 (1994) 『ひとは発話をどう理解するか一関連性理論入門一』ひつじ書房)